



十五年戦争と私たち

なげけるか

いられるか けた もどけるか

まげはてしなき むだつみのいん

学長 山田 舞

1985年

福島大学教職員「戦争・戦後体験」記録刊行委員会

亡父母の“戦苦”話から

今 野 順 夫

昭和19年 宮城県女川町に生まれる
昭和57年～ 在職 労働法

今夏、元気だった父が急死した。72歳であった。すでに大学の卒業(昭和42年)の1週間ほど前に48歳の母を喪っていたので、私にとって両親は、思い出の対象となってしまった。

昭和13年生れ、15年生れ、17年生れ(幼児期死亡)、19年生れ(私)の子を抱えての両親にとっての育児は、銃弾から子供の生命を守ることだったのだろう。

家業は海のカキを詰める木樽を作っていたらしい。父が出征したのは、昭和19年4月である。父の出征記念写真の中には、大きなお腹をかかえた母が並んでいる。つまり、私の出生とその後6ヶ月後に亡くなった祖父の死を父が知らされたのは中国大陸だったようだ。

女川は、東北の貧しい一漁村にしかすぎないので、平和かというところではなかった。天然の良港といわれ、リアス式海岸で、湾は山に囲まれ、深い。軍艦もかなり停泊していたようだ。そのため、米軍機が湾内に停泊している軍艦めがけて、爆撃をくりかえしたようだ。魚市場に、マグロを並べるように、湾内で死んだ多数の兵士の遺体が並べられた(勿論、お棺にも入れないで)という話は、子ども心にもショックだった。今でも、水揚げされたマグロは整然と並べられるが、それを

見て「マグロの刺身で一杯」と思う人が大方だろうが、私には、兵士の遺体の話とダブッてしまう。眼前に陸地があるから逃げればよいと思うのだが、負傷してなくても爆撃され沈んでゆく軍艦から全く離れようとしなかった多くの兵士の死は、一体何だったんだろうか。父の出征以後、子どもを抱えながら家業を継続する母は、事業統制もあり、多難を極めたようだ。空襲警報で一たん防空壕に入りながら、もう大丈夫と思い、空腹をいやすために、家でご飯を炊いたとたん、屋根の上で、突然爆撃がはじまった。もう駄目だと思っただけに、軍艦に対する発砲であった。こうした話は、子ども心に動悸の高なるものであった。

敗戦、幸いなことに父は2年ほどで生還した。初めて私は父と逢ったことになる。「もし戦死していれば、お前の顔は1度も見ないでしまった」という話は、悲しい話であった。父は生還したが、仕事がなく、母はホヤなどの行商をした。真夏の暑い田んぼ道で、背中の赤ん坊である私は、よく泣いたらしい。その時は、ホヤを水洗いして口に含ませると泣きやんだという。ホヤは私にとって珍味ではない。コメだったのかもしれない。父が仕事につく頃には、ついに母は病に倒れた。母は戦死ではない。しかし、戦争と切り離して考えがたい。

戦争が単に軍人だけの問題でなく、1人1人の子供の心と生活までもズタズタにふみつぶしてしまうものであることは、父母の思ひ出話からも知った。平和は貴い。憲法9条は庶民の平和な日常生活を希望する気持そのものだったのだろう。

しかし、私が小学校に入学したのは昭和26年だが、その前後に朝鮮戦争が勃発し、「いつかきた道」を歩みはじめた。それでも、教室の中は、まだ明るかった。先生も理想に燃え、平和と民主主義を語った。戦争への道に抵抗した。……そして30年がすぎた。子どもの顔

に陰がでてきた。平和と民主主義、理想を語り、実践する教師は、当局から、また同僚からも白眼視されるようになってきた。理想を語らず、自己保身と現実適応志向型の新しい教師もふえてきた。理想に燃えない教師の下に、明るい子どもの笑顔がみられるだろうか。

国民の尊い犠牲の上に築かれた平和が、いま危機にさらされようとしているとき、軍備増強にストップをかけ、核兵器廃絶を緊急に実現させてゆくことは、子ども達に対する親・教師の責務であり、最大のプレゼントであろう。